

友人との話

三 枝 博 音

B 「文藝部から何か書いて送れと言つて來なかつたか」

A 「來たよ」

B 「何か書くのか」

A 「書きたいと思つてゐる」

B 「どんなことを書くつもりだ、僕は思ひ出ならば書いて見たい氣持があるが長くなりそうだし、といつて後輩の鞭達など出来る柄ぢやなし、」

A 「無論思ひ出の簡結は困るよ。が鞭達云云のことは考へやうじやあるまいか」

B 「じゃ君はどう考へる。」

A 「僕は熊本を去つてから、自分の力の足りないのに思ひつくとき、或は自分の仕事に自信を持つとき、僕は自分の過去を考へて見る、そうするといつても僕の追憶は五高の生活に歸る。そしてどうして私は熊本を選んだかを考へる。高等學校は幾つもあつたらう、そのどれへでも行けたらうと思ふ。然しそれは取る途はいくらもあるといふ假定の上のことだ。實現する事實はたゞ一途しかない。そう考へると私の中には五高的なものが、熊本的なものが、多分に、はじめからあつたのだと思ふ。決して偶然ぢやない。そう思ふと私には暑さ寒さの變りの激しい、大きく呼吸づいてゐる熊本の自然、要領よさそうで實は多分にへマな五高の學生、意氣ばかり盛んで實質の抜けた氣風かと思ふと普ヘルンや漱石などが残して行つた靜かな思

索的なものが何處にか残つてゐる五高全体零團氣、私には限りなくなつかしいものとなつて現はれる。」

B 「僕にもよく解る、それで」

A 「そういふ五高にあつて今成長しつつあり、のびつつある人達を思ふと、私は語りかけたくなる。それは自然と鞭撻とか激勵とかいつたやうな形になることもあらう。それはどうでもいふ。」

B 「君が先づ語りかけたいといふことは……」

A 「わたしはどこまでもわたしなのだ、だから従つて今の自分の状態から感じてゐることから語りかけたい事柄が出て来る。そうなる僕と僕の語りかけたことが五高の人達すべてに意味があるとは云へなくなるだらう。私は言ひたい、夢を持つ人であつて欲しい。夢だ。夢だ。フアンタジイのないところには實在もなければ現實もない。狭い意味の詩人になれといふ意味ではさらさらないことは解つてもらへると思ふ。今私は山紫水明の靜かな箱庭のやうな自然の中にある人達に語りかけてゐるのではない。」

いくら夢を持たふと今の時代はただの空想者をかくまつて置いてくれるやうな時ではない。夢をもつ人、それも生活から離れるのではなしに、力いつぱいに。」